

大腸がん検診のおすすめ

大腸がんは、早い段階では自覚症状がないことが多く、進行すると症状がでることが多くなります。血便、腹痛、便の性状や回数に変化したなどの症状がある場合には検診を待たずに医療機関を受診する必要があります。

1 大腸がんの状況

日本全国で1年間におよそ158,000人が大腸がんと診断されています。やや男性に多い傾向にあり、30代前半から増加して、高齢になるほど多くなります。男性では胃がん、前立腺がんについて3番目、女性では乳がんに次いで2番目に多いがんです。

2 大腸がん検診の方法

大腸がん検診は40歳以上、年に1回定期的に受診することが推奨されています。

大腸がん検診として「効果がある」のは「問診」に加え、「**便潜血検査**」です。2日分の便を採取し、便に混じった血液を検出する検査です。

3 大腸がん検診の精密検査

検診で「異常あり」という結果を受け取った場合は、必ず精密検査を受けてください。

大腸がん検診における一般的な精密検査は全大腸内視鏡検査、大腸内視鏡検査と大腸X線検査の併用法(全大腸内視鏡検査が困難時)、または大腸CT検査です。

※便潜血検査の再検査は精密検査ではありません。必ず上記の精密検査をお受けください。

・全大腸内視鏡検査

精密検査の第一選択です。下剤で大腸を空にしたあとに、内視鏡を肛門から挿入し、直腸から盲腸までの大腸の全部位を観察します。がんやポリープに対する診断精度が非常に高いですが、まれに出血や穿孔(穴があくこと)などの偶発症があります。

・大腸のX線検査(大腸内視鏡検査との併用法)

大腸全体を内視鏡で観察することが困難な場合には、内視鏡の届かない奥の大腸をX線検査で調べます。大腸のX線検査は、下剤で大腸を空にしたあとに、肛門からバリウムを注入し、空気で大腸を膨らませて大腸全体のX線写真をいろいろな方面から撮影する検査です。

・大腸CT検査

肛門からガスを注入し大腸を拡張させ、X線で撮影する検査です。